

令和5年度 米子市の認知症施策を考える会（オレンジの会）報告書

日 時：令和6年2月22日（木）18時30分～

場 所：米子市役所本庁舎4階401会議室

出席者：委員（敬称略）

高田照男（会長）、廣田裕（副会長）前田朋子、田住英之、川島雅弘、木村留美子、
吉野靖子、浦木寿美子、足立伸一

オブザーバー（敬称略）

槇原海優、織奥奈々、米村功

事務局（4名）

足立長寿社会課長、柄川高齢者福祉担当課長補佐、小椋担当課長補佐、長門主事

傍聴者：1名

議事内容

（1）第9期米子市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画における認知症施策について

（米子市からの説明）

第9期米子市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画における認知症施策について説明。認知症基本法の中で、認知症施策の推進に関する市町村計画の策定が努力義務とされているが、市町村が策定する「認知症施策推進計画」という点についても、委員の皆様からご意見をいただきたい。

（高田会長）

新しい認知症の考え方は誰でもなるということだと思うが、誰でもなるのであれば、認知症の人に限らず、集いの場に自分も出たいと感じる。認知症の本人や家族にとって、話ができたり、くつろいだりできる場所は大事だと思うが、誰もが歳をとれば行けるような場所ができればもっと良いと感じた。

（吉野委員）

認知症という名前になってから、病気と言われるようになって、認知症という言葉がひとり歩きしていると感じる。認知症サポーター養成講座の冊子が変わった大きな理由は、認知症という特別な考え方をするのではなく、全ての人が安心して暮らせるということにある。目が悪くなったら眼鏡をかけたり、足が悪くなったら車椅子を使ったりするように、いろいろなサポートがありながら、それぞれが自分の障がいに対して生きていける社会になればいいが、まだ認知症だけが特別で、何かしてあげないといけないという考え方があると感じる。そのような考えがある限りは、一人の人間として生きていこうとする本人にとっては生きづらさがあると思う。先日会った認知症の本人は、認知症の人と家族の会という言葉もおかし

いと感じると言われていた。言葉の使い方ひとつひとつから変えていかないといけない。

(浦木委員)

認知症基本法ができて、こういうような社会になってほしいと思っていたことが、文書によって示されて、読んだときに、なんて良い法律ができたんだろうと感じた。いくつかの理念があるが、市町村がそれを具体化していくべきだと思った。去年、認知症に関する市民講座に参加し、すべて勉強になったが、参加者が限られていて人数が少なかった。広報によって、市民に認知症の理解を深めてもらうことが大切で、行政の力が必要な部分であると感じた。行政や家族の会、今日参加されている関係者の方と同じ方向を向いて連携し、取り組んでいくことが大切だと思っている。

(高田会長)

自分自身、認知症になったら、認知症だとは言われたくないと思う。歳をとって、何かが少しできなくなっただけというような捉え方をしてほしい。計画には様々な施策が書いてあるが、具体的にどのようなことに取り組んでいくのか期待をしている。

(廣田副会長)

認知症は一般的な病気になってきたが、医療に関してはとても大変。例えば、心不全になった場合に、心不全の薬を飲むかは認知症の有無に左右されることがある。国の方針でヘルパーの点数が下がるとあったが、これを危惧している。認知症の親の面倒をみれない人も多いので、介護の仕事の中でどれだけ認知症の人の面倒をみれるのか、行政もよく考えないといけない。認知症の人が安心して住めるまちということは大事だが、認知症の人を安定してみれる環境をつくり、生産力を高め、地域の経済を成り立たせないといけない。若い人が働ける環境が大切。専門医の外来がすごく混んでいるという現状がある。

(前田委員)

認知症ケアパスをよく活用している。見やすく、案内もしやすい。いつも診断を受けた方に案内しているが、知らない人が多いのが残念に感じる。広報が大切という話があったが、もう少し配る方法等を検討していく必要があると思う。

(米子市)

ケアパスの配布については、配布先や方法等について効果的なものを検討していきたい。

議事内容

(2) 認知症の人の行方不明に関する施策について

(米子市からの説明)

認知症の人の行方不明に関する施策について説明。

(高田会長)

米子市で事前登録している人は現在でどのくらいいるのか。

(米子市)

登録者数は令和6年2月現在で344人である。

(吉野委員)

自分が関わった人には事前登録を薦めている。事前登録していることを忘れている人もいるため、ケアマネジャー等、関わっている人に周知するということが大事だと思う。

(米子市)

ケアマネジャーへの周知は大事だと考えているため、ケアマネジャーが集まるような場で周知していきたいと考えている。

(高田会長)

医療機関との連携はいいことだと感じる。具体的にどのようなことをやっていくのか。

(米子市)

これまで医療機関と密に連携をとるという機会が少なかったように感じている。病院の受診等を通して米子市の施策を知ってもらえるようにしていきたい。

(高田会長)

既存の会議の場などを活用して周知ができると考える。

(川島委員)

窓口に来た方に事前登録制度のことを話すと、知らないと言う人がまだ多い。地域の方に広めるための広報については、打ち手がまだあると考える。薬局には、認知症の人はもちろん、その予備軍となる人も多く利用するため、薬剤師会との連携を図ってもらえると、周知に協力できると考える。

(米子市)

医療機関のほか、もの忘れ相談薬局とも連携を図っていきたい。

(高田会長)

3月には、疾患医療センターが主催する連携協議会が開催されるため、そのような場で市の施策を周知してもらおうと効果があると考えます。

(吉野委員)

今はスマホを使っている人が多く、アプリの活用が有効だと考える。行政にはアンテナを高く持ってもらいたい。また、若い世代の人たちが認知症について理解してもらおうことが大切である。

(木村委員)

吉野委員の意見のとおり、認知症の啓発は、高齢者だけでなく、若い人に知ってもらうことが大切である。認知症見守りシール交付事業については、発見者が増えないと効果が得られないため、普段認知症との関わりがない方にも知ってもらう必要があり、広報が大切になってくると考える。

(足立委員)

事前登録をしてもらえると、警察としてもすばやく捜索にあたることができる。事前登録できるのは、MCI レベル以上の者か。

(米子市)

認知症等の人で行方不明になる可能性のある方であれば登録できる。

(田住委員)

見守りシールやGPSについては、情報があっても実際に物を見ないと分からない部分も多い。そのような要素について、捜索模擬訓練に取り入れても良いのではないかと考える。

(米村オブザーバー)

認知症の人にどれだけ使ってもらえるかが重要。認知症の本人が気楽に使ってもらえるような製品や、それを認める環境をつくるのが大切ではないかと考える。

(高田会長)

見守りシールは、自分が認知症と表示しているように感じて、身に着けたいとは思わない。認知症は特別なことという考え方をなくし、不安な人は誰でも使えるという風になれば良いと思う。

(田住委員)

医療介護職の連携はできているが、医療介護職とスーパーや金融機関等のそれ以外の職種との連携について、具体的に進めていく必要があると考える。